

『関根仁応日誌』に見る大谷大学史

——教団改革運動から真宗大学東京移転まで——

大谷大学史資料室 研究補助員 大畑 博 嗣

はじめに

幕末から明治にかけての真宗大谷派は、幕末の元治元（一八六四）年に禁門の変による兵火により御影堂・阿弥陀堂を含む諸堂が全焼するが、明治二十八（一八九五）年には御影堂・阿弥陀堂の再建がなるのである。

このような状況の中、寛文五（一六六五）年に設立された学寮は、明治六（一八七三）年には貫鍊場、明治十二（一八七九）年には貫鍊教校と名称を変える。さらに明治十五（一八八二）年には貫鍊教校を大学寮と名称変更される。そして、明治二十九（一八九六）年には、「大学寮条例」を廃止し、新たに「真宗高倉大学寮条例」と「真宗大学条例」を制定し、大学寮にあった本科第一部・本科第二部・研究科の三つを真宗大学、宗乗専攻院・安居の二つを真宗高倉大学寮として編成したのである。このようにして、大谷大学の前身である真宗大学が発足したのであるが、同年に起こった清沢満之等の白川党による教団改革運動の影響を受け、真宗大学の学生達も白川党に同調して教団改革運動に参加し、運動に参加した学生等は、退学処分が付されたのである。教団改革運動を主導した清沢等は宗派から除名処分に付されていたが、渥美契縁に代わって大谷派当局を任された石川舜台によって再び登用され、真宗大学が東京へ移転されるのである。¹

このように、真宗大学が東京へ移転する経緯の概略を述べたが、大谷大学の歴史を綴った『大谷大学百年史』（以下『百年史』と略す）には、清沢が『教界時言』に社説として執筆した「真宗大学の位置に就て」など、清沢の言説や動向を中心に取り上げて論述されており、東京移転の際に清沢以外にどのような人物が東京移転準備に関わっていたのか不明である。しかし、近年に真宗大谷派教学研究所から『関根仁応日誌』（以下『日誌』と略す）という史料が刊行されている。後に詳しく触れるが、記主である関根仁応は、真宗大学の学生時に清沢満之と共に教団改革運動に参加しており、後に大谷派宗務総長や大谷大学学長を歴任した人物である。関根が記した『日誌』には関根自身の記録だけではなく、教団改革運動期の真宗大学学生の動向や真宗大学東京移転準備期などの動向について記載が見られ、この『日誌』は大谷大学の歴史だけでなく、明治期の真宗大谷派の動向を知る上で大いに注目すべき史料になるのではないかと考えられる。そこで、本稿では教団改革運動期と真宗大学東京移転準備期であった明治二十九年から明治三十三年までの関根仁応の動向を『日誌』から辿っていき、関根を中心にして『大谷大学百年史』では著述されなかった大谷大学の歴史が明らかになるのではないかと考えるのである。

一、関根仁応と『関根仁応日誌』について

(1) 関根仁応について

日誌の内容を検討する前にまず、関根の略歴について触れておく。当資料室所蔵の明治から戦後にかけての大学行政文書である『大谷大学資料』に関根に関する史料が所収されている。昭和十六（一九四一）年九月、関根が大谷大学学長に就任する際、文部省に提出した学長認可申請書や本山への申込願等申請書類一括が所収されており、その中に関根の履歴書が残されている。その履歴書によれば、明治元（一八六八）年三月に新潟県長岡市安養寺に生まれ、草間姓であっ

た。そして、明治二十七（一八九四）年私立真宗大学本科を卒業し、明治三十二年新潟県新発田市長徳寺に養子に入り、娘の関根ノリコと結婚し、関根姓を名乗る。同年には、真宗大学主幹に就任する。その後、大正四（一九一五）年には大谷派教学部長に就任し、その四年後の大正八年には嗣講を授与される。大正十二（一九二三）年には参務に就任し、昭和十一（一九三六）年に大谷派宗務総長に就任した後、大谷大学学長に就任する。学長就任二年後の昭和十八（一九四三）年に七十五歳で死去するのである。

このような活動の他にも、関根は様々な活動を行っている。明治二十八（一八九五）年十一月に発刊された雑誌『無尽灯』の編集に関わっており、『日誌』第一巻の中心となる内容である。⁴ また、後にも触れるが、清沢満之や暁鳥敏・多田鼎・佐々木月樵といった浩浩洞のメンバーであった人物とも関係を有する人物でもあり、清沢等と教団改革運動に身を投じていた人物でもあった。

（2）『関根仁応日誌』について

次に『日誌』について触れておきたい。

真宗大谷派教学研究所以から『日誌』が発刊される以前には、法蔵館版『清沢満之全集』に掲載されて『日誌』の存在が明らかになっていたが、抄録であったために全容が不透明な状態であった。⁵ しかし、関根の自坊である新潟県長岡市長徳寺には、関根関係資料が現存している。そこで、真宗大谷派教学研究所以から、その中の日誌の体裁をもつもので、明治年間のもの三十一冊を全八巻で刊行する予定である。⁶

原史料の詳細な法量や体裁に関しては、松本専成氏による『日誌』第一巻から第三巻の解説に譲るが、『日誌』中に「巡察後ハ炬燵ヲ調ヒ日誌ヲ認ム」など日誌を書いた書き込みがある。このような書き込みは毎日ではなく、数日の間隔で書かれている。また、『日誌』中には手紙や電信の内容、人と会話した内容も詳細に記している。こういったことから、

関根は『日誌』をその日ごとに書いたのではなく、その日あったことをメモなどに記して、後日数日分をまとめて清書していたことが窺われる。

二、真宗大学の動向と関根仁応

(1) 教団改革運動期の関根仁応

それでは、真宗大学をめぐる動向と、それに伴う関根の動向について『日誌』から辿っていく。本節では、教団改革運動期の関根の動向を中心として見ていきたい。

周知の通り、教団改革運動は「白川党」事件とも言われる出来事であった。先にも触れたが大谷派は当時、幕末の元治元（一八六四）年に禁門の変による兵火により御影堂・阿弥陀堂を含む諸堂が全焼し、その再建のために多くの負債を抱えていた。そのため教団は、財政本位の政策を余儀なくされていた。そこで、清沢満之は今川覚神等十二名とともに東本願寺の宗務改革に関する建白書を寺務当局に提出し、宗門全体が教団本来の教学中心の運営になることを求め、清沢・今川・月見覚了・稲葉昌丸・清川円誠・井上豊忠の六人が京都白川村に籠居し、明治二十九（一八九六）年十月に教界時言社を設立して機関紙『教界時言』を発売し本山改革を唱える。その結果、明治三十年には、大谷派革新全国同盟会が組織され、多くの賛同者を得て活動を行った。この運動に伴い、執事渥美契縁は更迭され、石川舜台が新しく寺務を担当することになり、末寺会議制度の体裁をとった議制会の設置などの政策がとられたが、結果的にはこの運動は挫折するのである。

このような清沢らの動きに、真宗大学の学生達は呼応し、研究科十四名、本科生八十六人が大学へ休学届を提出し、教界時言社の主張を支持するのである。¹⁰しかし、本山当局は学生の動向に対し、

真宗大学ニ於テ左ノ各名ハ所化ノ本分ヲ失シタル行為アルニツキ去ル十一日退学ノ処分ニ及ヒタル旨申報ナリ

研究科三年

伏見研明 草間仁広

渡辺西相

出雲路善祐

清水演道 江上大成

(以下学生名省略)¹¹

と、関根をはじめとする教団改革運動に参加した学生を本山当局は退学処分に処するのである。『大谷大学百年史』では、運動に参加したメンバーの中に関根が入っていることが指摘しているが、関根たち真宗大学の学生達が具体的にどのような活動をしていたかについては触れていない。¹²しかし、『日誌』にはこの時期の真宗大学学生の動向が記された記事があり、『日誌』の記事から関根たち真宗大学の学生が教団改革運動にどのように関与していたのか辿っていく。

先に挙げた『本山事務報告』の記事からもわかるように、関根は教団改革運動期には真宗大学の研究科三年に在籍していた。教団改革運動について、真宗大学の学生の間で議論が行われ始めたのは、『日誌』から明治二十九年十月十三日に共楽館で行われた、『無尽灯』創刊一周を記念した茶話会後からであることがわかる。当日の記事を見ると、関根は茶話会に出席した後、同級の出雲路善祐、本科一部四年の九頭竜教護・智治心寂と共に共楽館の別室で晚餐を取った際、去る十一日に白川二三三という人物を訪問した時に話題になったことを出雲路等に話している。そこでは、内事・財務・人物・組織¹³について話題に挙がっており、この話を聞いた出雲路等は、「今度ハ事容易ナラズ」と感想を述べるにとどまっている。しかし、一部の学生であるが教界時言社が発足した三日後には、教団改革について話を聞いていたことが『日誌』から伺える。

その後の関根の動向については、名畑氏の研究に依拠しながら述べていく。

関根ら真宗大学の学生は、「我が敬愛なる父兄同胞及び門信徒に訴ふ」という一文を全国各地の新聞社に送付し、いく

つかの新聞社がこの一文を紙面に掲載した。この一文は、『日誌』に「宣言書」と出てきており、同年十月三十日条には、「中島所作ノ所謂宣言書」を関根が受け取り、一読していることがわかる。そして、その日の内に清沢満之へ「宣言書」の校正を願ひ出ている。¹⁴名畑氏によれば、この「宣言書」の内容は、『教界時言』創刊号に掲載された「大谷派の有志者に檄す」に沿う内容になっており、「内事」、「財政」、「教学」の三点に焦点を絞り改革の必要性を訴えている。しかし、「我が敬愛なる父兄同胞及び門信徒に訴ふ」は、「教学」を一つ目にあり、その後「内事」、「財政」と論じているところに違いがある。¹⁵

その後、真宗大学の学生等は、十一月三日に、「追テ出雲路等皆会シ南浮ノ舎ニテ記名、欠席ニツキ議スル所アリ」と翌日の休学届提出について、学生間で話し合いが持たれていたことが『日誌』の記載からわかる。その話し合いにて休学届提出が決定されたと思われ、翌日に大学内では「今朝所化一同ニ対シニ主幹ヨリ学生ノ本分ニツキ欠席杯セサル様ニト説諭セリ」¹⁷と主幹から学生に休学しないように話があったと記しているが、学生らは休学届を提出しており、その日の記載は数行程度で、他の日に比べると簡素である。

さらに、関根は出雲路と共に渥美契縁の自宅に赴き、渥美へ執事辞職を迫っている。休学届を提出した二日後の十一月十一日に、関根は学生等七名で渥美契縁の自宅へ訪ねたが、二度面会を断られたが、三度目に関根を含め三人で面会することが許され、渥美宅の一室で、辞職を迫るのである。しかし、

執曰ク既ニ辞表ヲ出セリ 御採用否ハ法主ニアリ 唯之ヲ待ツノミト 予ハ以テ一同ニ伝ヘント云ヘリシトキ執曰クソコ等ニ云ハレテスルニ非ズト 語気甚タ穩カナラズ 猶イヘリキ 辞表ト共ニソコ等ガ不穩ノ挙動ニツイテモ上申ニ及ビオキタリト 自ラ威迫スルモノアリシカ如シ¹⁸

と、渥美は自身で辞表を法主に提出しており、辞表とともに学生等が不穏な動きをしていることも上申していることがわかっている。その旨を聞いた関根らは、「辞表出タリノコトナレハ一先ッ帰レリ」と、目的が達成され

たため渥美宅を後にする。しかし、その後、大学講堂に召集を受けた学生等は、主幹から退学処分を言い渡される。『日誌』には、

十一時ヨリ講堂ニ列シテ二主幹ノ達シニヨリ百名ハ退学申付ケラレタレリ 其語左ノ如シ「所化ノ本分ニ違背シタル行為ヲナセルニツキ退学申付ク」ト太田氏之ヲ讀ミ次ニ舎監本日中ニ退舎セヨト告グ²⁰と講堂に集まった学生達は、主幹から退学を告げられ、宿舎から退去するように告げられている。退学を言い渡された学生達は、荷物を始末して講堂で勤行を行った後、その日のうちに退去している。退学後、関根等は学生同士で集まり会合を行っており、²² 教団改革運動を継続しており、積極的に活動を続けていたのである。

(2) 真宗大学東京移転準備期における関根仁応の動向

前節では、教団改革運動期の関根の動向について、『日誌』の記事から辿っていった。教団改革運動が終息した後、関根は清沢らとともに真宗大学東京移転準備に関与していくのである。真宗大学の東京移転の経過に関しては、『百年史』に詳細に述べられているのでそちらに譲るが、²³ 本節では真宗大学東京移転準備期の関根の動向について、前節と同様に『日誌』から辿っていく。

前節でも触れたように、関根は清沢らの教団改革運動に賛同し、活動を行っていたが、明治二十九（一八九六）年十一月に真宗大学を退学処分となっていた。しかし、翌三十年八月三十日付の『本山事務報告』に真宗大学の卒業式の記事を見てみると、研究科卒業者名簿に「草間仁応」と名前が記載されている。²⁴ 退学処分を受けた後、関根等学生はどのようにして真宗大学に復学したのかについては、『日誌』が明治三十年三月から八月まで欠落しているため、大学や学生の動向が不明である。しかし、『百年史』によると、明治三十年四月十四日に石川舜台は真宗大学生に対して、学制の改革・職員の更迭・大学の新築などを骨子とする提案を行い、正常化を図った。それに対し学生は、教職員の更迭・新学制の

大綱の提示・学校新築の位置を明言すること・新築工事は議制局で決議後、ただちに着手することを本山当局に提出し、大筋に認められ、教職員の更迭が実現したため、四月二十四日から授業が再開された²⁵とある。このことからすると、関根等真宗大学生は四月二十四日以降に復学し、その年の八月に真宗大学研究科を卒業したと考えられる。

その後の関根は、出身地である新潟に帰省し、自坊の仕事しながら新潟にあった宗門学校であった真宗米北中学校の経営に尽力するのである。『日誌』によると、関根は明治三十年十一月東京経由で新潟に帰省した後、真宗米北中学の経営に尽力し、明治三十一年四月五日付で米北中学の校長に就任している²⁶。

しかし、明治三十二年七月二日に本山から「用向有之候条至急出頭可有之候也²⁷」という六月二十七日付の手紙が関根の元に届く。この手紙に答え、関根は七月二十七日に本山へ出頭する。そこで、布教局録事・列稟授三級を命ずる辞令を受け取るのである²⁸。そして、翌日には、布教局の兎門録事から「愈事務ノ分担ヲナサント要セリ」と言われるが、これを辞退し、この旨を布教局の長谷局長にも伝えている²⁹。さらに関根は、文書掛から役輪袈裟を渡されるが受け取りを拒否している³⁰。関根が本山布教局へ入局を拒否していることに関して、清沢満之との関わりが考えられる。西村見曉氏によると、清沢はこの時彰如の誘いにより、明治三十二年六月十四日に病氣療養中であった自坊の西方寺から東京へ移転している³¹。しかし、東京へ移住した十日後の六月二十五日付の月見覚了宛の書簡には、

就いては会合の節の大問題は、つまり我等の本山に対する態度を再議する事に可有之歟と存候へ共、尚ほ断然山政なるものに接触するの時機にあらずとするも、亦た一種の事情によりては、少しく山事に接近致候ては如何に可有之候哉。然れば前件（稲兄の件）如きは、或は其の一たるにあらざるか。勿論目下東西京にある山勢の我等に対する関係を審議するにあらずば、到底決し難き儀とは存候へ共、例の時宜を弁ぜざる懸念を一寸開陳申上置候間、御考の上或は会合時の問題に御加被下度願上候³²。

と今は「山政」に接近する時期でないとするが、事情によって「山政」に接近することがあれば、どのようなことが

起こるのかと本山への参政について否定的な態度を示している。また、清沢自身の日記である『臚扇記』には、「葦原子来訪、藤堂氏に会見を誘ふ。必要なきを以て辞謝す。」や「真宗中学在話中、葦原子来訪。藤堂氏よりの使旨を伝へ、山政には無関係にて会見を求む。乃ち之を応諾す。」³⁴とあり、清沢は本山当局とは距離を置いていたと考えられる。『日誌』からは、布教局録事に任命されてから清沢と手紙や電報のやり取りが見えないが、これらの清沢の動きに同調して関根も本山当局との関わりを持つことを拒否していたと考えられる。

しかし、関根や清沢等は、石川舜台や和田円什の大学運営の要請に対し、本山側が清沢等の条件を受ける形で、引き受けるのである。その様子を『教学報知』第二五一号が伝えている。

旧白川党諸氏は客月末上京し同土相寄りて決議するところあり結局清沢満之氏は同士の総代となり、去九日東上し在京中の石川舜台和田円什の両師に面談して種々談するところありて、結局本山は清沢氏一派の要求条件を容るゝことゝなり同派学制に関する全体即ち大中学を清沢氏等に一任することに決したりと云ふ、今清沢氏が要求せし条件の重なるものなりと云ふを聞くに一、真宗大学を東京に移すこと、二、毎年一ヶ年間の大学の経費として二万五千円を支出すること、尚ほ当初三ヶ年間の経費を銀行に別預けとして此金は本山内に他日如何様なることあるも其變動には一切関係なきこと、三、教育上の方針、学課編成等教育に関する全体を一任して更に容喙せざる事等の条件なりと³⁵

とあり、真宗大学を東京に移すこと、毎年一年間の大学の経費として二万五千円を支出すること、教育上の方針、学課編成等教育に関する全体を清沢等に一任し口出しをしない事等の条件により、清沢等が受け入れるのである。

しかし、『日誌』を見ていくと、この『教学報知』の記事にあるように、清沢側と本山側との話し合いが、すぐにまとまったとは考えにくい。『日誌』によれば、この記事が出る前に東京において、和田・清沢・秦・関根の四人が浅草別院にて話し合いが行われていることがわかる。その話し合いでは、

和田氏ハ二条件ニツキテハ余リ確トモ明言セズ 其東京ニ移ルト決スル迄ノ処 処置相談セリ 氏ハ頻リニ同志中ヨリ一人ニテモ推セヨト云ヒ、此方ノ決議ハ局長ヲ以テ之ニ宛テン管ナレハ是非共夫ニヨラレ度シトテ双方ヨリ利害得失ヲ説ケリ 結局秦君ハ断然継続時期ハ局長ニテ学監ヲ勤メラルベシ 此レ纏テ同志等ノ推挙ナリ 若シ同志ニシテ全然此事ニ意ナクンバ局リテ参務ニ兼任ヲ勸メンヤ云云 是ニ至リテ双方言尽キ参務ハ予モ考熟スヘケレハ君等モ一考アリ度シテ別レタリ³⁶

と真宗大学の東京移転について相談を行っていたが、和田氏は同志の中から一人代表者を出すように打診をするが、逆に清沢側は局長か参務が学監を勤めるべきであると主張しており、平行線のまま相談が終わっている。だが、話し合いの後、清沢・関根は、和田氏と共に石川舜台と対面している。そこで、石川は、

翁ハ寺務所ノ惨状ヲ歎キ老朽事ニ堪ヘサルコトヨリ後継者ヲ作ルノ急ナルガ為ニ、月、清、予三人ヲ入所ニ決セル理由ヲ陳シ其突然決行セル所以及ヒ自ラ退職ノ決心、後ヲ憂フルコトナド云云シテ頻リニ入所ヲ勸ムル 否寧ロ哀請スルモノ、如クアリキ³⁷

と寺務の惨状を嘆くより後継者を作るために月見・清沢・関根を当局に入所させること、石川自身の進退の決心などを述べているが、清沢等は「会議ニハ全ク入所ノ機ニアラズトシ学校ノ方ノミ先ズ条件ヲ附シテ決セシノミ 然レハ無論即答ハナリ難ケレハ一応相談ノ上答ヘン云云³⁸」と当局に入所する時期ではないので、大学の方だけ条件を出して決定したが、相談の上返答すると答えている。だが、『日誌』にはこれ以降交渉している記事が見当たらないので、『教学報知』の記事のように決定したと考えられる。

その後、九月九日には関根は、真宗大学主幹の辞令と共に米北中学校長の任を解かれている。³⁹このようにして、清沢や関根は大学運営を引き受け、真宗大学の東京移転へと向かうのだが、最後に経費に関して問題が残っていた。

『教学報知』では、「毎年一ヶ年間の大学の経費として二万五千元を支出すること」と経費に関して明記がされていた

が、『日誌』を見ると経費に関する交渉に關しても記載が見られる。九月二十日に本山側から銀行との交渉が難航しているため、二十二日に面会するように依頼されて、支店長と会談を行っている。この時、支店長が「断シテ印形ヲ捺スルノコトハ出来得ヘカラス」と融資に難色を示している。さらに、建築費についても工面するのに苦勞していることが『日誌』から伺える。明治三十三年三月七日には、須磨の別荘を売却し、その金銭を大学建築費に当てるよう建議案を起草している。⁴¹この記事以降、須磨の別荘の売却したお金が建築費に転用されたかは『日誌』に記載が見えない。さらに『宗報』にも臨時議制会議が行われたことは触れているが、議事に関するは「秘密会なりしを以て記載するを得ざる」とあり、臨時議制会議が「秘密会」であるため、議事の内容を公開していない。また、経費に關しても、明治三十三年三月の記載が始まる前に関根が残したメモの中に総務大谷勝縁、石川舜台以下数人の連署にて『教学報知』に掲載していた記事と同一内容の書状の写しが残されていること、⁴³明治三十三年に校舎建築が本格的に開始されていることからすると経費・建築費については支払われることが決定したものと考えられる。⁴⁴

さらに、明治三十二年十月に行われた議制会では、真宗大学条例改正に關する決議が行われていた。関根は二十七日に行われた議制会を傍聴しており、「東京ニ置クノ文字ヲ条例中ニ加フルノ議ハ満場一二曖昧ノ反対ヲ生セルノミニテ大多数ノ決議ヲナセリ」と記しており、議制会で真宗大学条例に東京移転することが明記することが決定された。その日の夜には清沢へ報告をしている。その後、十二月二十八日には、条例の改正が行われ、「東京ニ設置シ」の六文字が書き加えられるのである。⁴⁶その後、本格的に東京に真宗大学の校舎建築が開始される。

明治三十二年十二月に大学用地代の払い渡しと土地登記手続きが完了した⁴⁷真宗大学は、翌年一月から土地の測量・見地に着手している。⁴⁸しかし、建物の設計図が完成し、入札準備に入る六月まで時間を要している。その間、本山当局と建築費の交渉を行っており、『日誌』中にも当局と関根が交渉している記事が散見できる。そして、当局と建築費について交渉している中、関根は東京で文部省に赴き、徴兵猶予申請を行っており、二月二十四日に認可が下りていることが

『日誌』から確認できる。⁴⁹ また、関根は大学建築に関して、新潟から東京へ赴いており、五月二十二日には、文部省の技手と建築請負、建築位置について会談を行っている。そこで、建築期限にも触れており、「建築期限ハ来年五月頃ナラシテ、寄宿舎文ケナラハ本年中に出来セント久留及服部ハ言ハレタリ」と建物⁵⁰が完成するのは、来年五月頃であると文部省技手から言われている。しかし、七月には業者との本契約が成立し、業者との交渉の結果、落成時期は翌年一月三十一日に決定したことが月見覚了からの手紙からわかる。⁵¹ また、清沢も六月二十九日付の井上豊忠へ宛てた書簡に「真宗大学の事も、昨夕を以て教場、寄宿舎及び附属建物の請負本契約締結相済（五万七千円）、先づ一段落を見申候⁵²」とあり、六月二十八日に教場、寄宿舎及び附属建物の本契約が締結したことがわかる。その後、工事は着々と進み、十月には清沢から工事の進捗状況を知らせる手紙が届き、⁵³ 関根もまた自坊がある新潟へ帰る途中、東京へ立ち寄り、清沢と月見と共に工事現場へ赴き、現場の様子を見学している。⁵⁴ そして、周知の通り、明治三十四（一九〇二）年九月に真宗大学は東京に移転し、十月十三日に開学するのである。

むすびにかえて

本稿では、教団改革運動期と真宗大学東京移転準備期の関根の動向について、『日誌』の記事から抽出し、関根の動向を辿ってきた。ここでは、今まで辿った関根の動向をまとめて、結びにしたい。

教団改革運動期に研究科三年であった関根は、清沢等の教界時言社が訴える本山改革に賛同して、他の真宗大学の学生と共に教団改革運動に参加するのである。きっかけとしては、『無尽灯』創刊一周年を記念した茶話会後からである。当日の記事を見ると、関根は茶話会に出席した後、同級の出雲路善祐、九頭竜教護・智治心寂と共に共楽館の別室で晚餐を取った際、白川二三三という人物を訪問した時に話題になったことを出雲路等に話している。その後、関根を始めとする学生等は、「我が敬愛なる父兄同胞及び門信徒に訴ふ」という一文を全国各地の新聞社に送付し、いくつかの新聞

社がこの一文を紙面に掲載した。この一文は、『教界時言』創刊号に掲載された「大谷派の有志者に檄す」に沿う内容になつてはいるが、学生達も改革の必要性を訴えている。また、大学に休学届を提出して授業のボイコットを行っている。また、執事であった渥美契縁宅を訪ねて辞職を迫っており、白川党と同調しているが、学生等独自に教団改革運動の活動を行っていることがわかる。しかし、本山当局は学生等に対し、退学処分という重い処分を下しているが、それでもなお活動を続けていることが、『日誌』から確認できる。

教団改革運動終息後、関根は真宗大学を卒業するが、明治三十一年十月から自坊がある新潟へ帰省して真宗米北中学の運営に携わり、明治三十一年四月五日付で米北中学の校長に就任している。しかし、本山から出頭するよう手紙が届く。この手紙に答え、関根は七月二十七日に本山へ出頭する。そこで、布教局録事・列稟授三級を命ずる辞令を受け取るのである。一度は、当局へ入局することを拒否していた関根であったが、清沢満之と共に石川舜台や和田円什の大学の運営の要請に対し、本山側が清沢等の条件を受ける形で引き受けるのである。議制会による真宗大学条例改正の決議を受けて、本格的に東京移転準備が動き出すが、関根は本山当局と真宗大学経費・建築費の交渉や文部省への徴兵猶予申請、文部省技手との会談等に奔走している。その結果、明治三十四（一九〇一）年九月に真宗大学は東京に移転し、十月十三日に開学するのである。

これまで、『日誌』の記事より関根の動向を辿ってきたが、「真宗大学の位置に就て」で真宗大学を東京へ移転させる構想を持ち、真宗大学建築掛の一人でもあった清沢は、当時どのような行動をとっていたのであろうか。清沢が記した日記類に、真宗大学建築に関する記述は、『当用日記』に「月見、関根、斎藤の三氏と共に工事観覧」⁵⁵とある以外、管見の限り見当たらない。また、清沢が記した書簡には、先に挙げた井上豊忠宛ての書簡以外にも稲葉昌丸や村上専精に宛てた書簡にも工事の進捗状況を知らせている。⁵⁶『清沢満之全集』に収録されている『当用日記』に関して、抄録であるため詳細な清沢の動向は不明であるが、清沢の書簡類や『日誌』などから関根が京都で本山当局との建築費の交渉を行っ

ているのと平行して、東京での工事に関わる交渉を行っていたのではないかと考えられる。

このように、『百年史』では触れられていなかった、教団改革運動期から真宗大学東京移転準備期にかけての関根の動向を辿ってきたが、関根の動向からより詳細な東京移転準備期の状況が復元できたのではないかと考える。二〇一一年に大谷派は親鸞七百五十回御遠忌を迎えるが、その二年後の二〇一三年には、大正二（一九一三）年に大谷大学が東京から現在地に移転してちょうど百年にあたる年である。『百年史』は、清沢の動向や言説を中心とした論述方法をとっていた。しかし、この機会を生かし、『日誌』や他の真宗大学に尽力した人物の日記・記録類を再検討し、「大谷大学史」を再構築し直す必要があるのではないかと考えるのである。

註

- 1 『大谷大学百年史』〈通史編〉（大谷大学百年史編集委員会編、二〇〇一年）
- 2 『教界時言』第九号（教界時言社、一八九七年）
- 3 「昭和十六年度九月分教職認可・解職認可申請書類」（『大谷大学資料』57箱―93）
- 4 『日誌』第一巻の内容に関しては、名畑名日児「明治期の大谷派宗門の動き―『関根仁応日誌』を通して―」（『教化研究』第一三七号、真宗大谷派宗務所、二〇〇七年）を参照されたい。
- 5 『清沢満之全集』第八巻（晁鳥敏・西村見晁編、法蔵館、一九五六年初版、一九七六年第三版）
- 6 前掲註4、松本専成「解説」（『日誌』第一巻、真宗大谷派教学研究編、二〇〇六年）
- 7 前掲註6 松本氏「解説」
- 8 『日誌』明治二十八年十二月十三日条（『日誌』第一巻、真宗大谷派教学研究編、二〇〇六年）
- 9 柏原祐泉『日本仏教史 近代』（吉川弘文館、一九九〇年）、同氏「近代真宗大谷派の歷程」（『真宗史仏教史の研究Ⅲ 近代編』第一篇第一章、平楽寺書店、二〇〇〇年）、『真宗大谷派近代史年表』（教学研究編、真宗大谷派宗務所出版部、一九七七年初版、二〇〇四年第二版）

- 10 前掲註 1
 『本山事務報告』第三十八号（『宗報』等機関紙復刻版 五卷、真宗大谷派宗務所出版部、一九八九年）
- 11 前掲註 1
 『日誌』明治二十九年十月十三日条
- 12 『日誌』明治二十九年十月三十日条
- 13 『日誌』明治二十九年十月三十日条
- 14 前掲註 4
 『日誌』明治二十九年十一月三日条
- 15 『日誌』明治二十九年十一月四日条
- 16 『日誌』明治二十九年十一月四日条
- 17 『日誌』明治二十九年十一月十一日条
- 18 前掲註 18
 『日誌』明治二十九年十一月十二日条
- 19 前掲註 18
 『日誌』明治二十九年十一月十二日条
- 20 前掲註 18
 『日誌』明治二十九年十一月十二日条
- 21 前掲註 1
 『本山事務報告』第四十七号（『宗報』等機関紙復刻版五卷、真宗大谷派宗務所出版部、一九八九年）
- 22 前掲註 1
 『常葉』第十九号（『宗報』等機関紙復刻版五卷、真宗大谷派宗務所出版部、一九九一年）
- 23 『日誌』明治三十二年七月二日条（『日誌』第一卷、真宗大谷派教学研究所編、二〇〇七年）
- 24 『日誌』明治三十二年七月二日条、『宗報』第十号付録（『宗報』等機関紙復刻版九卷、真宗大谷派宗務所出版部、一九九二年）
- 25 『日誌』明治三十二年七月二日条、『宗報』第十号付録（『宗報』等機関紙復刻版九卷、真宗大谷派宗務所出版部、一九九二年）
- 26 『日誌』明治三十二年七月二十八日条
- 27 『日誌』明治三十二年七月二十九日条
- 28 『日誌』明治三十二年七月二十九日条
- 29 『日誌』明治三十二年七月二十九日条
- 30 西村見暁『清沢満之先生』第四章（法蔵館、一九五一年）
- 31 月見覚了宛書簡（『清沢満之全集』第九卷一九〇号、大谷大学編、岩波書店、二〇〇三年）
- 32 月見覚了宛書簡（『清沢満之全集』第九卷一九〇号、大谷大学編、岩波書店、二〇〇三年）

- 33 『臚扇記「注釈」』明治三十一年九月十九日条（大谷大学真宗総合研究所編・校注、法蔵館、二〇〇八年）
- 34 前掲註33 明治三十一年九月二十日条
- 35 『教学報知』第二五一号
- 36 『日誌』明治三十二年八月九日条
- 37 前掲註36
- 38 前掲註36
- 39 『日誌』明治三十二年八月九日条、『宗報』第十三号付録（『宗報』等機関紙復刻版九卷、真宗大谷派宗務所出版部、一九九二年）
- 40 『日誌』明治三十二年九月二十日条、九月二十二日条
- 41 『日誌』明治三十三年三月七日条（『日誌』第三卷、真宗大谷派教学研究編、二〇〇八年）
- 42 『宗報』二十一号（『宗報』等機関紙復刻版十卷、真宗大谷派宗務所出版部、一九九二年）
- 43 『日誌』第三卷六十三頁
- 44 前掲註1
- 45 『日誌』明治三十二年十月二十七日条
- 46 『宗報』十九号付録（『宗報』等機関紙復刻版十卷、真宗大谷派宗務所出版部、一九九二年）
- 47 『日誌』明治三十二年十二月二十一日条
- 48 『日誌』明治三十三年一月二十九日条
- 49 『日誌』明治三十三年二月七日条、二月二十四日条
- 50 『日誌』明治三十三年五月二十二日条
- 51 『日誌』明治三十三年七月一日条
- 52 井上豊忠宛書簡（『清沢満之全集』第九卷二二五号、大谷大学編、岩波書店、二〇〇三年）
- 53 『日誌』明治三十三年十月十九日条
- 54 『日誌』明治三十三年十一月二十二日条
- 55 『当用日記抄』明治三十三年十一月二十二日条（『清沢満之全集』第八卷、大谷大学編、岩波書店、二〇〇三年）

56 稻葉昌丸宛書簡（『清沢満之全集』第九卷二〇八号、大谷大学編、岩波書店、二〇〇三年）、村上専精宛書簡（『清沢満之全集』第九卷二〇六号、大谷大学編、岩波書店、二〇〇三年）

【付記】

本稿を執筆するにあたり、真宗大谷派教学研究所助手名畑直日見氏、大谷大学短期大学部仏教科助教西本祐攝氏に御教示を頂いた。この場を借りて御礼申し上げます。